

■プログラム概要

「死生学」は、死すべき存在である人間のあり方を見すえ、そこから生きることの意味を再考し、死を意識せざるを得ない人間を主題とする学問です。また、「応用倫理」は、現代社会のさまざまな場面で起きている諸問題に即して、私たちがどのような姿勢で、どのような対応をすべきかを考える営みです。科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にするに従い、これまでは考えられもしなかったさまざまな問題が生まれてきました。寿命を延ばすこと、生きることだけが価値があるとして、生物としての人間にとって不可避の死から目をそらしてきたわけですが、それは逆に人間の生の内実を貧弱にしてきたのではないか、という反省があります。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか、また人間にとって生きることと死ぬことはどのようなものであるべきなのか、このような問いから発したのが、「死生学」であり「応用倫理」であると言えます。いずれも、その問いが包括的であることから、哲学、倫理学、宗教学、歴史学から、社会学、心理学、教育学、更に医学、看護学、法学、技術系の諸学問領域に至るまで、幅広い分野を包含することになります。

2011年に発足した人文社会系研究科「死生学・応用倫理センター」は、死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために、学部横断型の「死生学・応用倫理教育プログラム」を開設し、これらの分野に関する学際的な知識を有する学生の育成を行います。関心を有する学生諸君の積極的な参加を歓迎します。

■プログラムの構成

「死生学・応用倫理教育プログラム」は必修科目（概論）、必修選択科目（演習）、選択科目の3種類の授業からなります。必修科目は「死生学概論」「応用倫理概論」の2講義4単位、必修選択科目は「死生学演習」「応用倫理演習」のうちから2単位、選択科目は6単位、計12単位以上の履修により、修了が認定されます。履修者に対しては、東京大学教育運営委員会より修了証を付与します。

【修了に必要な単位数】

	科目名	必要単位
必修科目	死生学概論（2単位）	4単位
	応用倫理概論（2単位）	
選択必修科目	死生学演習（2単位）	2単位
	応用倫理演習（2単位）	
選択科目	各部局で開設する科目	6単位

死生学概論、応用倫理概論は重複履修することはできません。

必修選択科目を2単位を越えて履修した場合、越えた分は選択科目として算定されます。

■対象

学部生と大学院生。但し、大学院生が履修を希望する場合は、学部生向け科目を登録してください。

■プログラムへの参加方法

必修科目・選択科目ともに、所属する各学部で通常通りの履修手続きを行ってください。所属学部以外の科目については、他学部履修の手続きを行ってください。

計12単位以上を取得し、修了証の交付を希望する場合は、UT-mateにて修了証発行の申請手続きを行います。申請を行うのは、卒業・修了予定の学年の年度末になります。具体的な申請期間は、当プログラムのホームページか、所属する各部局の事務にご確認ください。

修了証を発行できるのは、卒業・修了年次のみとなります。

なお、修了を目的とせず、個別の科目を履修することも歓迎いたします。

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」平成29年度開講科目
(教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部04175501

堀江 宗正ほか 「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 S1+S2 木2 法文2号館1番大教室

本学部の死生学・応用倫理センターに関係する教員が担当し、死生学研究の主なトピックを取り上げて、死生学の現在を概観する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生に関する諸問題が取り上げられる。その際、異なる学問分野からの多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。

- | | | | |
|------|------|-------|-------------------------|
| 第1回 | 4/6 | 堀江 宗正 | 死生学とは一人間の生と死 |
| 第2回 | 4/13 | 早川 正祐 | ケアの死生学—病苦の語りとケア |
| 第3回 | 4/20 | 池澤 優 | 死生学と宗教—《死者性》の視点から |
| 第4回 | 4/27 | 伊藤 高章 | 自殺に関する研究と対策 |
| 第5回 | 5/11 | 堀江 宗正 | 死生にまつわる宗教心理 |
| 第6回 | 5/18 | 一ノ瀬正樹 | 「安楽死」再考 |
| 第7回 | 5/25 | 鉄野 昌弘 | 『万葉集』の死と笑い |
| 第8回 | 6/8 | 秋山 聰 | 死をめぐる美術 |
| 第9回 | 6/15 | 蓑輪 顕量 | 仏教からみた死生 |
| 第10回 | 6/22 | 武川 正吾 | 生と死の社会学 |
| 第11回 | 6/29 | 榊原 哲也 | 生きる意味を支えるもの—現象学からのアプローチ |
| 第12回 | 7/6 | 林 伸宇 | いのちの教育 |
| 第13回 | 7/13 | 会田 薫子 | 臨床現場の死生学 |

文学部04176701

池澤 優ほか 「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 法文2号館1番大教室

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度はオムニバス形式で生命倫理、環境倫理、技術倫理、現代倫理などに関して順次講じていく予定である。

- | | | | |
|-----|------|-------|-----------|
| 第1回 | 4/7 | 池澤 優 | イントロダクション |
| 第2回 | 4/14 | 池澤 優 | 生命倫理 |
| 第3回 | 4/21 | 池澤 優 | 生命倫理 |
| 第4回 | 4/28 | 池澤 優 | 生命倫理 |
| 第5回 | 5/12 | 会田 薫子 | 臨床倫理 |

第6回	5/26	西村 明	戦争と記憶
第7回	6/2	池澤 優	研究倫理
第8回	6/9	堀江 宗正	現代倫理
第9回	6/16	小島 毅	環境と文化
第10回	6/23	福永 真弓	環境倫理
第11回	6/30	福永 真弓	環境倫理
第12回	7/7	松本三和夫	技術倫理
第13回	7/14	池澤 優	まとめ

□選択必修科目

文学部04175505

早川 正祐 「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理） 2単位 A1+A2 金4 法文1号館219教室
病いに関する物語論の古典であるArthur W. FrankのThe Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics（『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』）を講読する。病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語り相互にどのような関係にあるのかを考察すると同時に、コミュニケーション・身体・脆さ（vulnerability）・傾聴・証人・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方を考えていく。

文学部04175502

堀江 宗正 「死生学演習Ⅱ」（批判的死生学） 2単位 S1+S2 金2 法文1号館116教室
死生学においては臨床実践に関わる著者の影響力が大きい。その主張、論点に、人文社会系の学問の立場から批判的な検討を加えることは、死生学の発展において極めて重要である。この演習では、そのような批判的視点を提供する理論的な著作・論文を中心に読み進めてゆく。

文学部04175504

池澤 優 「死生学演習Ⅲ」（死生学基礎文献講読） 2単位 A1+A2 金3 法文1号館319教室
死生学における重要文献を日本語で講読する演習。死生学はおおむね1960年代の欧米で確立したが、その背後には当時の死のあり方に対する反省としての「死の自覚運動」が存在し、一定の思想性や文化性を有していた。それに対し現在の日本に適合した「死生学」を確立するためには、欧米の死生学の性格を理解すると同時に、幅広いディシプリンを知る必要がある。本演習はそのような問題意識に基づき、死生学の方法論を模索するために、その基本文献を日本語で講読する。本年度は、アーネスト・ベッカー、今防人訳『死の拒絶』、門林道子『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』、山本俊一『死生学のすすめ』、平山正実『自死遺族を支える』などを講読したいと考えている。

文学部04176702

小松 美彦（非常勤講師） 「応用倫理演習Ⅰ」（科学的生命観と人生論的生命観Ⅱ） 2単位 A1+A2 水4 法文1号館116教室

従来の米国型生命倫理学では、そもそも「いのち・生命」が何であるかはほとんど論じられてこなかった。また、近年のバイオテクノロジーと先端医療の飛躍的な進展により、「いのち・生命」は科学でのみ解るかのような風潮が蔓延しているように思われる。しかし、「いのち・生命」を探究してきたものは決して科学だけではなく、文芸・絵画・音楽等々もまたそれを行ってきたのである。そこで、「いのち・生命」に関して科学と文芸とがそれぞれ探究してきた内実を検討し、すなわち、科学的生命観と人生論的生命観とを比較検討し、科学的生命観の限界を考察する。

『西洋生命論史—《いのち》は科学では分からない（仮）』を基本テキストとして、同書およ

び関連文献を輪読し、討議する。基本テキストは、西欧のギリシア時代から今日にいたる科学的生命観を歴史的に通覧した上で、いくつかの文芸作品の解説を通じて人生論的生命観について考え、科学的生命観の限界を検討したものである。

文学部04176703

一ノ瀬 正樹 「応用倫理演習Ⅱ」(科学と疑似科学のモラル) 2単位 S1+S2 水3 法文1号館317教室

「科学」と「疑似科学」という対比を軸に、科学的情報をめぐるコミュニケーションや情報リテラシーを主題化し、そこで発生しうる種々の道徳的問題について議論を展開・報告し、出席者とともに討論をしていく。まずは、反証可能性などの概念を手がかりとしながら、そもそも科学的情報となるための条件とは何かについて理論的に検討する。その後、いくつかの具体的トピックを取り上げて、一つ一つ状況を概観し、問題点を探っていく。たとえば、血液型性格診断、放射性物質、遺伝組み換え食品、子宮頸がんワクチン副作用、がん民間療法、EM菌、マイナスイオン、有機野菜、水からの伝言、ホメオパシーなどを取り上げたい。基本的な視点としては、一方で、水銀有効説、フロジストン、エーテル仮説など、自然科学は歴史的に何度も書き換えられてきたものであり、さまざまな仮説が提起されることは自然であるという立場に立ち、これは科学あれば疑似科学という二分法に陥ることを慎重に避けつつ、他方で、現時点での科学的水準から見たときの、疑似科学がもたらす道徳的問題について公正な観点から問い詰めていきたい。

文学部04176704

池澤 優 「応用倫理演習Ⅲ」(環境倫理文献講読) 2単位 S1+S2 月5 法文1号館216教室

いわゆる環境倫理と呼ばれる分野における古典を日本語で講読する演習。応用倫理と呼ばれる分野の中で最も大きな分野として確立しているのが、生命倫理と環境倫理であるが、前者が患者・被験者の自律的意思(インフォームド・コンセント)を最高の原則としたのに対し、後者は非人間中心主義を志向した点で、対照的であった。現在では、生命倫理における人格の尊厳も、環境倫理における非人間中心主義も、共にその限界が自覚されるようになってきているが、それらの原則が確立する上で、宗教上の理念や思想が(宗教という形をとることなく)一定の影響を与えたと考えられる。本演習では、初期の段階での環境倫理の文献を読むことで、そこに宗教の考え方が目に見えないような形で入っていないかどうか検討し、生命倫理との分岐がどこで生じたのかを考えたい。

文学部04176705

堀江 宗正 「応用倫理演習Ⅳ(1)」(環境思想研究) 2単位 S1+S2 火2 法文1号館117教室

宗教・哲学・倫理の領域にわたる自然・環境・生命に関する思想を探求する。授業初回時に文献一覧を提示し、受講生の関心に応じて適宜修正し、講読の対象を決める。

文学部04176706

堀江 宗正 「応用倫理演習Ⅳ(2)」(未来倫理の探求) 2単位 A1+A2 火2 法文1号館117教室

未来倫理に関する文献を複数読み、応用倫理との接続について考え、議論を深める。授業初回時に文献一覧を提示し、受講生の関心に応じて、講読の対象を決める。

文学部04176707

会田 薫子 「応用倫理演習Ⅴ」(生命倫理と臨床倫理の現在) 2単位 A1+A2 火5 法文1号館217教室

医療技術の高度化に伴い、従来は困難であったことが克服されるようになった一方、倫理的空白地帯が次々と生まれている。医療は自然科学を基礎とした医科学の知識をもとにして人間の健康を回復・維持増進しようとする分野であるが、医科学が実現できることと社会的に実施可能なことはイコールではない。しかし、どこで線を引くべきか、倫理的判断が容易でない課題が増え

つつある。

個人や集団の心身が健康であるか否かは、種々の社会的事象の原因でもあり結果でもある。また、より望ましい身体の状態に関する人々の欲求は、社会的な認識の変化によって変化する。したがって、社会的な認識の変化は倫理問題の性質と射程に直接的に影響する。

本科目では、bioethicsおよびclinical ethicsのテキストを読みつつ、現代の医学・医療と社会および倫理観の関係や関連する諸問題について考察を深める。文化差による問題の把握の仕方の相違を理解しつつ、事象の多面性を認識し、文化的な背景が個人の倫理観・死生観へどのような影響を及ぼしているかを考える。また、社会的に形成される「常識」を疑い、相対化する。デジタル時代に特有の問題を含め、急速に進展しつつあるこの分野の問題をリアルタイムで考察する。

□選択科目

文学部04175503

堀江 宗正 「死生学特殊講義」(死生の心理学) 2単位 A1+A2 金2 法文1号館 212教室

死生学には人文社会系の学問に基礎を置くものと、医療・福祉系の臨床実践に基礎を置くものとの二つの潮流がある。心理学は、この両者にまたがり、二つをつなぐ重要な役割を果たしうが、未だ発展途上にあるといえる。この授業では最近日本で出されたテキストを手掛かりとしながら、最近の学問動向を学ぶことを目標とする。

文学部04175506

会田 薫子・早川 正祐 「死生学特殊講義」(臨床死生学・倫理学の諸問題) 2単位 S1+S2 水6 法文2号館1番大教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸問題に関して、おもに若手研究者や外部から招いたゲストの研究発表とそれに基づく討議を行う。発表者およびテーマについてメールにて予め知らせるので、参加者はメールアドレスを予め担当教員に知らせ、発表予定のテーマに関して予習をした上で授業に参加することが望ましい。医療・介護の現場の実践者ないし現場に臨む研究者の発表が多く、現代社会における実際の問題について理解し考察を深めることを中心とするが、当該学問領域の理論的な進展も扱う。なお、発表者の都合により、授業時間が動いたり、別の日時を設定することがあるので、履修希望者は年度初めに予め担当教員に具体的計画について問い合わせること。

文学部04175507

会田 薫子 「死生学特殊講義」(臨床老年死生学入門) 2単位 A1+A2 木3 法文1号館217教室
超高齢社会における臨床死生学と臨床倫理学の問いに関する理解と思索をめざす。

予定トピック：超高齢社会の医療とケアに関わる諸問題(人口動態、老いて行くプロセスの諸問題、医療と介護の制度、End-of-Life Care (EOLC) の概念、EOLCと緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、生命維持とその差し控え・終了に関わる問題、尊厳死・安楽死など)

文学部04175508

早川 正祐 「死生学特殊講義」(共感とケアの哲学) 2単位 S1+S2 木3 法文1号館112教室

医療・福祉はもちろん、他の様々な場面で、共感やケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、それらの内実には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、臨床をめぐる倫理における鍵概念である「共感」と「ケア」について、それが指示する事象の豊かさを尊重しつつ、その意味内容を批判的に検討していきたい。

より具体的には以下のように講義を進める。まず英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理(Ethics of Care)において、共感やケア、またそれらの概念と不可分な、感受性や受容性といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。その上で昨今の(とりわけフェミニストによる)徳認識論(Virtue Epistemology)の知見を取り入れつつ、共感やケア(ま

た感受性や受容性)の認知的側面に関する考察を、いっそう深く掘り下げていくことになる。それによってケアの倫理(また広義の臨床倫理)の新たな展開—認識論的な展開—を試みたい。

文学部04175509

早川 正祐 「死生学特殊講義」(自律についての関係的なアプローチの展開) 2単位 A1+A2 木
4 法文1号館112教室

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy)について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち自己統治・権威性・真正性(authenticity)・統合性・合理性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセス(shared decision-making process)に相応しいものへと発展させる。

文学部04175510

榊原 哲也 「死生学特殊講義」(死生のケアの現象学) 2単位 S1+S2 金5 法文1号館312教室

看護ケア理論や看護ケアの質的研究において、現象学が注目を集めて久しい。それは、あらゆる事象を「生活世界」における「意味」体験の次元から捉え直そうとする現象学的哲学の営みが、個々の患者やその家族の「病い」の体験を理解する視点と、それに対処する方途を与えうると期待されているからである。

本講義では、「現象学」という哲学の基本的な理解をもとに、「ケア」がどのような営みであり、また死生のケアにはどのような視点が必要かを、受講者が理解できるようになることを目標とする。

自然科学的・医学的なものの見方の特徴を明らかにしたあと、そうした見方では捉えられない生活世界的意味経験とケアの営みを、現象学という哲学がどのように明らかにしていくのかを、主としてベナーの現象学的人間観と現象学的看護理論に即して概説する。さらに、わが国で近年展開されている現象学的看護研究を概観し、「死生のケアの現象学」のさらなる可能性について考えたい。

文学部04175511

大塚 類(非常勤講師) 「死生学特殊講義」(事例から読み解く生きづらさ) 2単位 S1+S2 火
4 法文2号館2番大教室

私たちはさまざまな生きづらさに晒されています。児童虐待や発達障碍のような、周囲からも認知され、当人も自覚しうるような生きづらさもあれば、「コミュ障」「繊細すぎて生きづらい」「異性にもてない」「毒親を持って余している」など、当人が自覚できなかつたり、したくなかつたりする生きづらさもあるでしょう。本講義では、私たち誰もが思い当たるような日常の生きづらさの事例に基づき、それらを哲学的な観点(自己意識、身体性、他者意識、世間、他者理解など)から考察することを試みます。そうすることで、生きづらさをより深い次元で捉えなおすと同時に、受講者ひとりひとりの自己理解や他者理解が深まることを目指します。

文学部04176708

会田 薫子 「応用倫理特殊講義」(質的研究法) 2単位 S1+S2 火5 法文1号館217教室

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ

面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部04176709

福永 真弓（新領域創成科学研究科） 「応用倫理特殊講義」（生と場所の環境倫理） 2単位 S1+S2
火4 法文1号館214教室

持続可能性という言葉のもとで、人と社会はどのような再編を求められ、新たな統治のシステムが作られようとしているのか。その中でよりよく「生きる」とは何を意味するのか、あるいは何を意味するものとして再編されつつあるのか。もはや人新世の時代と呼ばれるようになったこと、SDGsのもとですすむ市場や国際社会の統治と再編は、どのような意味と変容を人と環境の関わりにもたらしつつあるのか、あるいはどのような新たな関わり「現れ」なのか。本授業では、場所で生きることについて、人と人以外の生命、もの、事柄にかこまれて生きるわたしたちの生と生命について、環境倫理の現在を具体的な事例をもとに考える。特に、エスノグラフィーに基点をおきながら、環境被害や災害被災などの具体的事例をふまえ、学問と社会的実践のはざまに研究者が身をおくことの意味とその倫理性についても考えてみたい。

文学部04176710

森岡 正博（非常勤講師） 「応用倫理特殊講義」（生命の哲学と倫理） 2単位 S1+S2 金4 法文1号館314教室

生命の哲学と倫理について講義を行ない、この分野の最新の知見を概観して、それをオリジナルな哲学として展開するための道筋を探求する。取り扱うテーマは、人間の生命の尊厳、パーソンとペルソナ、反出生主義と誕生肯定、独在論、人間と自然の共生などである。出席者たちと適宜ディスカッションしながら授業を進める。授業計画は、実際の進行に応じて柔軟に変更する。

文学部04176711

村上 靖彦（非常勤講師） 「応用倫理特殊講義」（現象学的な質的研究） 2単位 S1+S2 集中教室未定

現象学的な質的研究の方法論を習得することを目的とする。専門看護師へのインタビューの分析を主に用いる（時間がゆるせば虐待関係のフィールドワークデータも持ちいる）。

急性・重症患者看護、がん看護、精神疾患看護、在宅看護といったいくつかの領域の専門看護師で指導的な立場にある人たちにお問い合わせしたインタビューデータを用いて、現象学的な分析を試みる予定です。

医学部

赤林 朗・瀧本 禎之・中澤 栄輔「生命・医療倫理 I」 2単位 A2 金曜1・2 医学部3号館 S101
医学部02246

上別府 圭子・佐藤 伊織「家族と健康」 2単位 A1 月1・2 教室未定

健康総合科学の対象としての、家族と健康の考え方の基礎を学ぶ。家族は社会を構成する最小単位であり、また、家族は一単位として健康総合科学実践の対象となる。国内外の、家族心理学・家族看護学・家族療法などにおける知見および理論を学び、さらに事例を通して、その実践の試みについての見識を深める。加えて、家族を健康総合科学研究の対象とする際に必要な基礎的知識と考え方を理解する。

農学部060500021

関崎 勉「生命倫理」 1単位 S1 月曜5限 農学部1号館第8講義室

農における「食」は、畢竟、ヒトはヒト以外の生命を喰うことによってしか生きられないという人間中心主義的な宿命を負う。人の社会と人の生命における倫理問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな生命の関わり方を取り上げ、農における生命倫理として多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追究すればよいかを考える。

バイオテクノロジーと社会との接点の問題という性質では、A2タームの「技術倫理」と関連する。

農学部060500031

根本 圭介「技術倫理」 1単位 A1 月曜5限 農学部1号館第8講義

教養学部08D1002

鈴木 貴之「応用倫理学概論」 2単位 A1+A2 集中 教室未定

科学技術は日々進歩を遂げていますが、その中には、遺伝子テクノロジーなど、われわれの生活に大きな影響をもたらす可能性があるものも数多くあります。そしてそれらの科学技術については、利用の是非をめぐってさまざまな論争が繰り広げられています。この授業では、このような、近い将来深刻な社会的・倫理的問題を引き起こす可能性がある科学技術のなかから代表的なものを取りあげ、それらにはどのような問題があり、それについてどのような論争が生じているのかを紹介し、われわれはそれらの科学技術とどう付き合うべきかを考えていきます。

教養学部08F1304

客員准教授 松本 真由美「科学技術リテラシー論Ⅱ」 2単位 A1+A2 水曜3限 教室未定

本講義では、担当主教員のほか、科学コミュニケーションが求められる現場の第一線で活躍するゲスト講師を招き、実践的な科学コミュニケーションのスキルについて学ぶ。学生は自らの科学コミュニケーター像を想定し、「伝える」「聞く」「質問する」「議論の調整」など科学コミュニケーションにおいて求められるスキルを養成していくことを目的とする。